

2025年日本国際博覧会 パビリオン・施設の紹介 (No.23)

シンガポールパビリオン

【基本設計】意匠：DP ARCHITECTS 構造：DP ENGINEERS PTE LTD

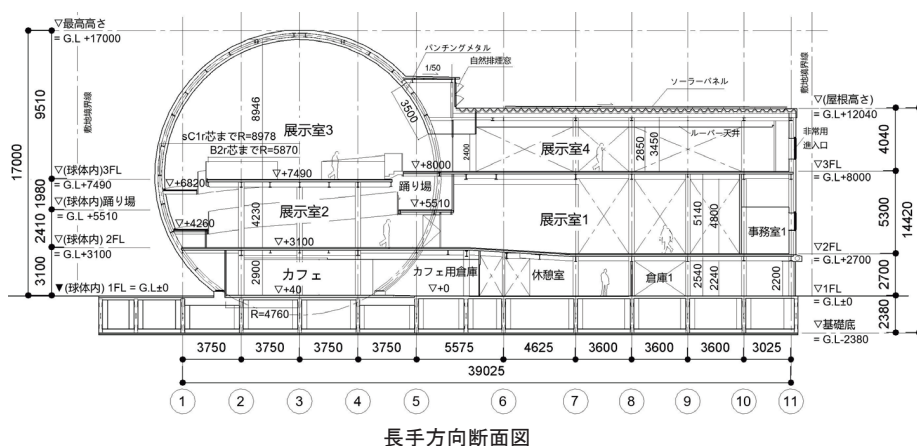
【実施設計】意匠：合同会社HUNE 一級建築士事務所 構造：株式会社満田衛資構造計画研究所



外観写真



外観パース（夜間）



長手方向断面図

球体の外装は、FRP（繊維強化プラスチック）で成形された下地の上に、ランダムに配置された約17,000枚のリサイクルアルミディスクによって構成されています。各ディスクの裏にはLEDライトが組み込まれ、夜間に光がやわらかく脈動しながら発光する演出が施されています。

【パビリオンの概要】

「リトル・レッド・ドット（小さな赤い点）」として知られるシンガポールの象徴を反映し、直径約18.5m、頂部の高さ約17mの赤い球体と、間口約14m～20m、奥行約24mの台形平面で高さ約12mのサポート棟から構成されています。両者は構造的・空間的に一体化し、調和のとれたデザインとなっています。

【設計概要】

球体内部には、1階にカフェを設置し、来館者がくつろげる空間を提供します。上階には2つの展示スペースがあり、螺旋状のスロープで結ばれています。スロープを上るにつれて没入感が高まり、最上部では360度の全天映像が投影され、視覚的・体験的に楽しめる展示が計画されています。

隣接する3階建てのサポート棟は、各階で球体と接続され、1階はバックヤード（BOH）機能、2階は展示のイントロダクションスペースとして活用されます。3階には自然光が降り注ぐ緑豊かな空間が広がり、シンガポールの「自然の中の都市」というコンセプトを反映した設計となっています。

球体は、経線沿いに同一曲率で曲げ加工された部材が12°ピッチ（計30本）で配置され構成されます。

本敷地下部の埋立粘性土層に起因する圧密沈下に対して、建物重量を排土重量以下に抑える浮き基礎とすることで、沈下を抑制する方針としています。

ソーラーパネルによって発電したエネルギーを館内システムに利用すること、再生原料を使用したビニル床材を採用することで、持続可能性に配慮しています。